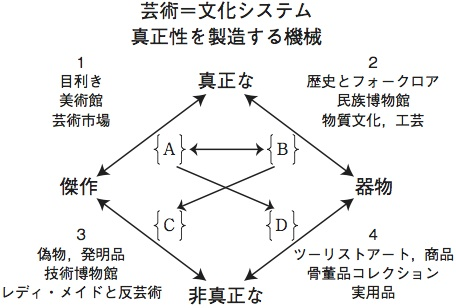
9　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。〈広島大〉　二〇一六年度出題

　イヌイトの村を訪れた私が、イヌイトの彫刻を買って持ち帰ったとする。その彫刻を独りででたり、みやげ話とともに身近な人びとと楽しんだり、友人に贈ったりするだけならば、それは記念品もしくはおみやげ品である。しかし、国際的なネット・オークションに出せば、この彫刻はおそらく「芸術」に変わる。ところが、私が持ち帰ったその他のさまざまなモノや情報とともに分類して整理し、その写真や実測図を調査報告書に記載して、この彫刻を研究室に保管すれば、それは民族誌的な標本となる。

　このようにモノが相貌を変えてしまうのは、そのようにモノを分類する制度があるからである。①ジェイムズ・クリフォードはこの制度を「芸術＝文化システム」と呼び、そのシステムに植民地主義的な権力構造が組み込まれていることを指摘した。「芸術＝文化システム」とは、「真正性」と「唯一性」を基準に人間の生み出す所産を、美術館に収集される「真正な芸術」、民族博物館に収集される「真正な文化的器物」、品コレクションに集められる「非真正な非芸術」（ツーリストアートやおみやげ品）、技術博物館に収集される「非真正な非文化」（偽物や技術的発明品）に分類する、欧米近代社会に独特なシステムのことである（図）。

　この分類システムが生まれたのは一九世紀末から二〇世紀前半にかけて、人類学が学問として体系化されるとともに、モダニズム芸術が人類に普遍的な美を発見した時期であった。このシステムの成立とともに、欧米の旅人たちが世界中から持ち帰ったモノが、諸民族の「伝統」的な生活を表象する民族誌的な標本と、人類に普遍的な美を表象する美的傑作とに分類されるようになった。また、そのそれぞれについて「真正性」が疑われるモノは、「非文化」（商品）と「非芸術」（まがい物）に分別された。そして、このシステムに依拠したアカデミズムと芸術市場の拡大とともに、このシステムは、欧米近代にローカルな制度であるにもかかわらず、人類の普遍的な価値基準として権威づけられていったのである。

【図】芸術＝文化システム（ジェイムズ・クリフォード）



　②このシステムの特徴は、モノの分類を媒介に人間関係が「支配する中心／支配される周縁」というかたちで固定されている点にある。もちろん、ネルソン・グレーバーンやクリフォードによって指摘されているように、③「非真正な非文化」であるツーリストアートが「真正な文化」に、「真正な文化」である工芸品が「真正な芸術」に変わることもある。しかし、この分類上の変動は集められるモノの作り手の側ではなく、モノを集めて分類する芸術市場とアカデミズムによって決められる。

　たとえば、作り手にとって、みずからが作るモノが芸術市場で流通することは、経済的にも「真正性」の点でも大きな意味がある。「真正」で唯一的な「芸術」は人類に普遍的な美を表象するモノとして特権化され、他に分類されたモノよりもはるかに希少で高値な逸品として芸術市場で流通するからである。しかし、作り手が芸術市場に参入するためには、この分類システムのなかで「芸術」の作り手として認められなければならない。分類の基準を定め、「芸術」を特権的な価値あるものとして流通させる資格をもつのは、普遍的な価値基準を備えているとされる欧米の芸術界とアカデミズム界なのである。

　欧米の芸術界と人類学界によって、周縁の諸社会の産物が一方的に分類され価値づけられる「芸術＝文化システム」が、ａアットウ的な支配力で世界を席巻していった様子は、以下に述べるイヌイト・アートの誕生と展開の物語に凝縮されている。

　イヌイト・アートの「芸術」としての歴史は一九四八年に遡る。その年の夏、カナダ極北圏のイヌイトのキャンプを訪れたジェイムズ・ヒューストンという画家が、イヌイトに肖像のスケッチを描いて贈った。そのイヌイトはカリブー（北米トナカイ）をった小さな石彫を彫ってお返しにした。その彫刻はヒューストンの目に素晴らしい「芸術」作品に映った。このとき、この画家に一つのアイデアと情熱が芽生える。イヌイトには「芸術家」の才能が潜んでいるのではないか。その才能を開花させることはできないだろうか。④これがイヌイト・アート誕生の瞬間である。この翌年からヒューストンはカナダ極北圏の各地をめぐり、「芸術」作品を作って販売することをイヌイトの間に普及させるとともに、カナダ内外でイヌイト・アートをプロモーションする活動を開始したのである。

　おりしも、一九世紀後半からイヌイトの生活を支えてきた毛皮交易は、世界市場での毛皮価格の低迷にともなって衰退しつつあり、イヌイトは新たな交易品を求めていた。ライフルや弾薬、鉄製品、小麦粉、茶など、生活の必需品になったものを手に入れる必要があったからである。また、第二次世界大戦後、極北圏の主権問題や冷戦のによってカナダ極北圏の経済的な潜在価値と戦略的重要性が増し、カナダ連邦政府は極北圏への関心を高めていた。連邦政府は一九六〇年代から実施していった学校教育制度や医療・福祉制度、ｂカヘイ制度の導入など、それまでは放任していたイヌイトの社会生活に介入し、⑤イヌイトを国民化するための政策を模索しつつあり、毛皮交易の衰退によるイヌイトの窮乏についても関心を払うようになっていたのである。こうした背景のもとでヒューストンの活動は成功を収めた。その成功をみて、連邦政府をはじめ、さまざまな政府機関や民間団体が、同様のｃショウレイとプロモーションを継続的に展開するなか、一九七〇年代にイヌイト・アートはカナダを代表する「芸術」に育っていった。

　もちろん、イヌイト・アートが何の土壌もないところから突然あらわれたわけではない。その源流となる造形の歴史は、イヌイトの直接の祖先とされるチューレ文化（Ａ．Ｄ．一〇〇〇～一五〇〇）や、それ以前にカナダ極北圏に広がっていたドーセット文化（Ｂ．Ｃ．五〇〇～Ａ．Ｄ．一〇〇〇）の担い手にまで遡る。この「先史時代」には、宗教的・儀礼的道具や護符、やｄシュリョウ具の装飾として、幾何文様から野生生物のイメージにいたるまで多彩な造形が行なわれていた。また、欧米社会との接触がはじまる一六、一七世紀から二〇世紀前半にあたる「歴史時代」には、カナダ極北圏を散発的に訪れる捕鯨業者、探検家、毛皮交易商人、宣教師、人類学者を相手に、イヌイトは彫刻を作っておみやげや記念品、民族誌的な標本として売っていた。

　しかし、ヒューストンの尽力によって誕生した⑥イヌイト・アートは、「芸術」として流通したという点で以前の造形品とは一線を画している。ヒューストンは品質の維持のために「工芸」や「ツーリストアート」としてではなく、「芸術」としてイヌイト・アートを作らせ、販売するという方針をとった。この芸術への転換は、イヌイト・アートが美術館や画廊で取り扱われるきっかけとなり、芸術としての権威づけを背景に欧米社会で根強い人気を獲得する素地を作った。さらに、ヒューストンは「極北のハンターにして芸術家」というイメージを巧みに織り込んだ詩情れるエッセイや小説をｅクシし、「間接観光」とも評される手法でイヌイト・アートの魅力を紹介することによって、他の「芸術」からの差異化にも成功した。

　こうした方針はヒューストンの後継者にも受け継がれ、イヌイト・アートは「極北のハンターの芸術」として流通するようになっていった。その過程で、熱心なコレクターが定着し、その作品はカナダを代表する美術館に収集され、おみやげ物屋ではなく、美術画廊をはじめとする芸術市場において高値で取引されるようになっていった。イヌイト・アートは、毛皮交易衰退以後、カナダ極北圏で唯一成功した産業として、イヌイトの生活を支える一助となったのである。

　このようなイヌイト・アートの誕生の経緯を振り返ると、その成功の物語が近代的「芸術＝文化システム」にイヌイト社会が従属的に編入されていった過程でもあることがわかる。たしかに、イヌイト・アートは「極北のハンターの芸術」として成功することによって、高価な「芸術品」として芸術市場で流通することが可能になり、イヌイトの経済の支柱の一つとなることができた。また、その成功は「極北のハンターにして芸術家」という肯定的なイメージを欧米社会に定着させ、自然と一体化した環境保護の元祖という今日のイヌイトのイメージの基盤となってきた。しかし、この経済的成功と肯定的なイメージが「芸術＝文化システム」に依拠したものであり、その中心である欧米の芸術界とアカデミズム界によって制御されていることを忘れてはならない。

　このように⑦成功の物語が従属の物語になってしまうことが、「芸術＝文化システム」の巧みなしかけであるといえる。「芸術」として成功を収めるということは、「芸術＝文化システム」の周縁の従属的立場にみずからを位置づけ、その中心による周縁の支配のシステムを強化することにつながってしまう。しかも、それはその分類システムの基準を受け入れることをも意味しているため、価値の均質化をもたらすことになる。こうして「文化帝国主義」に従属的な立場で参入することになってしまうのである。

（大村敬一「イヌイト・アート――「芸術＝文化システム」との関係で」による）

問１　本文中の二重傍線部ａ～ｅのカタカナを漢字で書け。

問２　傍線部①に「ジェイムズ・クリフォードはこの制度を「芸術＝文化システム」と呼び」とある。クリフォードの示した「芸術＝文化システム」の図における空欄Ａ～Ｄにはどのような語句が入るか。次のⅠ群・Ⅱ群の選択肢からそれぞれ最も適当なものを一つずつ選び、記号で答えよ。

〈Ⅰ群〉　　　　　　　　　〈Ⅱ群〉

　ア　文化　　　　　　　　カ　伝統的、集合的

　イ　芸術　　　　　　　　キ　複製、商業的

　ウ　非文化　　　　　　　ク　オリジナル、唯一無二

　エ　非芸術　　　　　　　ケ　新しい、普通でない

問３　傍線部②に「このシステムの特徴は、モノの分類を媒介に人間関係が「支配する中心／支配される周縁」というかたちで固定されている点にある」とある。このことを端的に表している表現を、傍線部②より前の部分から二十字以内で抜き出せ（句読点を含む）。

問４　傍線部③に「「非真正な非文化」であるツーリストアートが「真正な文化」に、「真正な文化」である工芸品が「真正な芸術」に変わることもある」とある。イヌイト・アートは、「芸術＝文化システム」において、どのように変化したか。本文中の言葉を用いて簡潔に説明せよ。

問５　傍線部④に「これがイヌイト・アート誕生の瞬間である」とある。なぜそう言えるのか。「これ」の指す内容を明らかにして、説明せよ。

問６　傍線部⑤に「イヌイトを国民化するための政策」とある。このような政策の意図はどのようなものか。本文中の言葉を用いて説明せよ。

問７　傍線部⑥に「イヌイト・アートは、「芸術」として流通した」とある。イヌイト・アートが「「芸術」として流通した」とはどういうことか。作り手と受け手の両側面から説明せよ。

◎問８　傍線部⑦に「成功の物語が従属の物語になってしまう」とある。なぜ筆者はそのように考えるのか。イヌイト・アートの例に沿って百字以内で説明せよ（句読点を含む）。

【解答と採点基準】

問１　ａ＝圧倒　　ｂ＝貨幣　　ｃ＝奨励　　ｄ＝狩猟　　ｅ＝駆使

問２　Ａ＝イ・ク　Ｂ＝ア・カ　Ｃ＝ウ・ケ　Ｄ＝エ・キ（Ⅰ群・Ⅱ群の順）

問３　植民地主義的な権力構造が組み込まれている（２０字）

問４　最初は彫刻を作ってＡおみやげや記念品、民族誌的な標本として売られていたが、欧米の芸術界と人類学界によってＢ芸術作品として分類され価値づけられるようになった。

ＡとＢの内容が書けていないものは全体０。

Ａ＝５〔「おみやげや記念品、民族誌的な標本」は本文にあるので片方だけならば２。〕

Ｂ＝５〔「極北のハンターの芸術」でも可。〕

問５　Ａイヌイト・アートは、Ｂもともと非真正な非文化であるおみやげ品あるいは工芸品だったが、Ｃ偶然訪れたある画家のアイデアと情熱によって 　　Ｄ「芸術＝文化システム」に乗せられ、Ｅ「アート」に仕立て上げられたものだから。

Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅがなければ全体０。

Ａ＝１／Ｂ＝２

Ｃ＝２〔「画家のアイデアと情熱」は必須。〕

Ｄ＝３〔「芸術＝文化システム」は必須。〕

Ｅ＝２〔「なぜ」と問われているので文末の「から」は必須。〕

問６　Ａ極北圏の主権問題や冷戦の勃発によって、Ｂ極北圏の経済的な潜在価値と戦略的重要性が増したため、カナダ連邦政府が、Ｃイヌイトを支配する周縁として、権力構造の中に固定しようという意図。

Ｃがなければ全体０。

Ａ＝２／Ｂ＝２

Ｃ＝６〔「イヌイト」「支配」「周縁」「意図」は必須。〕

問７　Ａ作り手の側からみると、経済的にも「真正性」の点でも生活を支える一助となったということであり、Ｂ受け手の側からみると、美術館や画廊で「極北のハンターの芸術」として取り扱われ欧米社会で根強い人気を獲得した

Ｃということ。

Ａ・Ｂがなければ全体０。

Ａ＝４〔「経済的に」は必須。「真正性」は「芸術」「アート」などでも可。〕

Ｂ＝４／Ｃ＝２

問８　Ａイヌイト・アートが高価な芸術品として流通するようになったことで、Ｂイヌイトは肯定的なイメージや経済的支柱を得たが、それは同時にＣ欧米中心の芸術界とアカデミズム界の価値基準の枠への従属を意味しているから。（９９字）

Ｂ・Ｃがなければ全体０。

Ａ＝２

Ｂ＝４〔「成功」の内容があれば可。〕

Ｃ＝４〔「従属」の内容があれば可。「なぜ」と問われているので文末の「から」は必須。〕